

# 文学部で「学ぶ」ということ

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長  
納富 信留

皆さんは、文学部というと、どんな「学び」を想像するでしょうか。文学部は哲学、歴史学、文学、社会学、心理学といった学問領域で、27の専修課程をかかえる研究・教育の場です。対象とするのは、人間や社会や宗教から言語や美術や考古遺物まで、文化にかかわるきわめて広い領域ですが、時代は古代から現代、さらに未来まで、地域も日本やアジアを中心に、ヨーロッパや南北アメリカや中東など、世界の各地に及んでいます。

これほど多様な分野が広がる文学部で、学生はいったい何を学ぶのでしょうか。いや、文学部で学ぶということはいったい何なのでしょう。実は、この問いを考えることも、いや、それを考えることこそが文学部の「学び」なのです。

ここで大学にある他の専門課程と比べてみましょう。資格を身につけることにつながったり、将来仕事に活かす技能や知識を得るような分野はたくさんあります。むしろ、大学とはそのような社会への準備をする教育機関だと思っている人も多いかもしれません。もちろん、そんな知識や技能も大切ですし、それに向けて勉強することも必要です。しかし、大学の学問というものは、そういった勉強とは区別されるもの、いや、まったく異なるものだと、伝統的に語られてきました。

文学部で従事する学問には、職業や実益に直結するような研究はあまりありません。私が専門としている古代ギリシア哲学は、二千数百年前に地中海地域で展開されたさまざまな思索と議論を、古典ギリシア語やラテン語で読んで考えるという、文字通り古典的な研究です。これまで西洋を中心に積み重ねられてきた膨大な研究蓄積と日々格闘しながら、地道にテキストを読解し議論して論文を書くといった、そんな学問営為です。しかし、単なる趣味に過ぎないのではないかと問われると、それは違うと答えます。文学部の学問研究は、私たち人間のあり方を全体から見つめ直し、そうし

て私たち自身が「人間」としてより善く生きていくための、もっとも根本的でもっとも大切な事柄を日夜考えることだからです。

文学部での学びの目的は、知識や技能の獲得ではありません。そうではなく、学びにおいて私たち自身が変わっていくことです。なにかを学ぶことで、自分が何者であるかが少しずつわかっていく。しかも、他者と対話することで自覚と変容を経験する、共生が目指されています。そこでは、こうして学問をして生きる人間という存在が問われ、したがって「学ぶとは何か」が問われ答えられることになるのです。

これは哲学に限られた事柄ではありません。歴史学では、過去の事実や状況を丹念に調べて考察することで、ある時代や人々の暮らしがどうだったかを知るだけでなく、そうして過去を論じる現在の私たちは何者か、歴史を研究するとは一体どういうことなのかが突きつけられます。文学の研究でも、対象とする小説や文学作品を精密に読み解き、豊かな背景や思想や影響などを解釈しながら、そうして文学を読み続ける私たち自身のあり方を見つめていきます。そこで、私とは何かに気づいたり、わからなくなったり、そうした気づきに驚いたりします。それは、哲学や歴史や文学をつうじて私たちが人間としての自己のあり方を発見し、成長していく軌跡です。おそらくそれが、文学部で学ぶという一つの姿なのだと思います。

そして、文学部で学ぶということは、なによりも悦びです。必要のために、社会の期待で勉強するのとは違い、文学部の学問は、それぞれの人が、自分の好きな対象やテーマを選んで、そこに没頭し沈潜しつつ、最終的に卒業論文をまとめるというもので、それこそが最高の楽しみなのです。楽しむなかで、自分が実現したい生き方や人間を見つめ、理想の社会像に出会い、自身をそれに近づけていく、それが文学部で皆さんが経験するはずの学問です。

こうして考えていくと、文学部の「学び」は別に文学部に限ったものではなく、大学での学問のすべてが関わり、その根底にあるものであり、さらに世界で私たちが生きていくあらゆる「学び」を支える基盤であるとわかります。

この機会を活かすかどうかは、それぞれの人にかかっています。文学部はできるだけ良い学びの場を提供していきますが、そこで「学ぶ」のは皆さん自身なのですから。